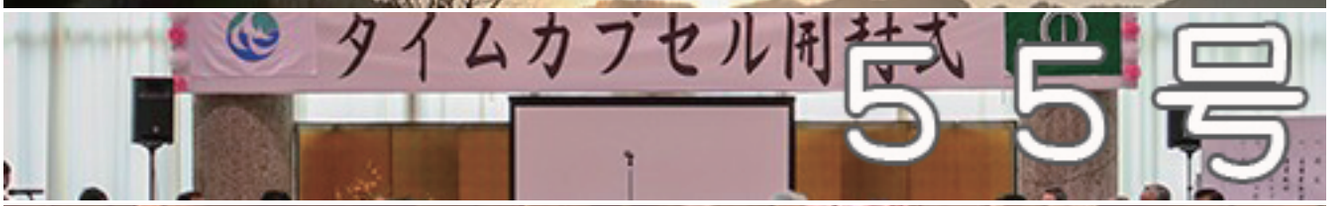
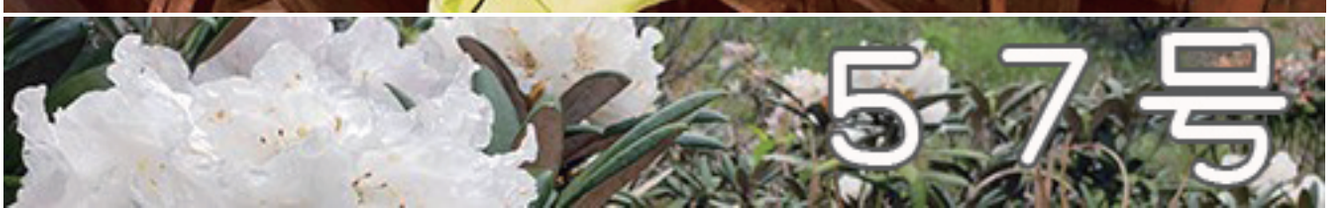
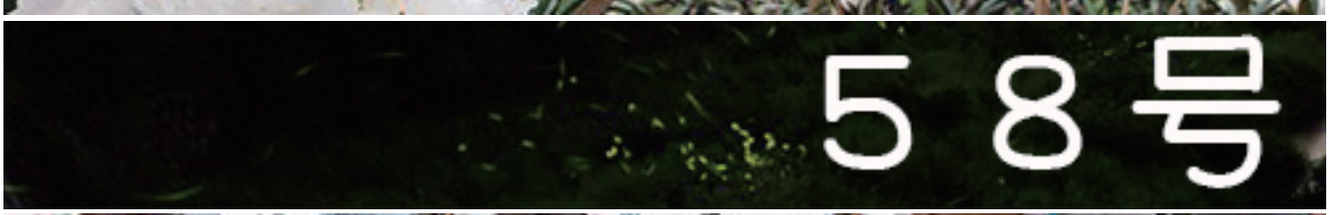
えーる！



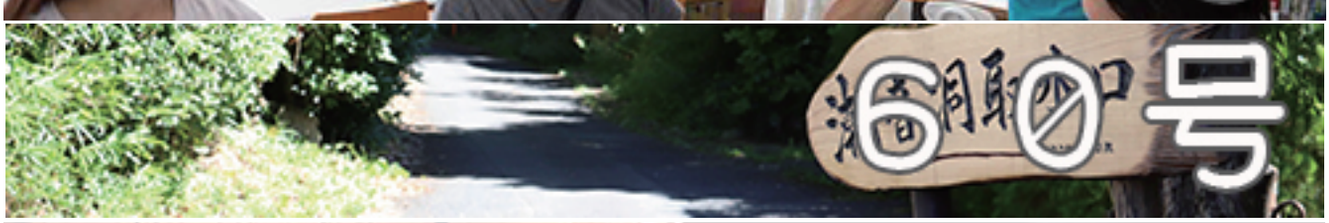


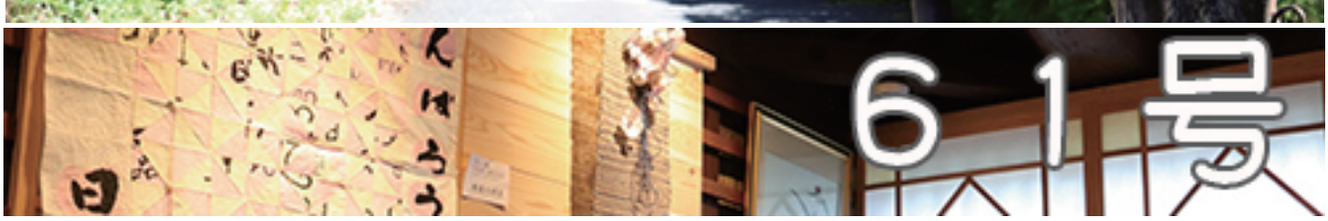


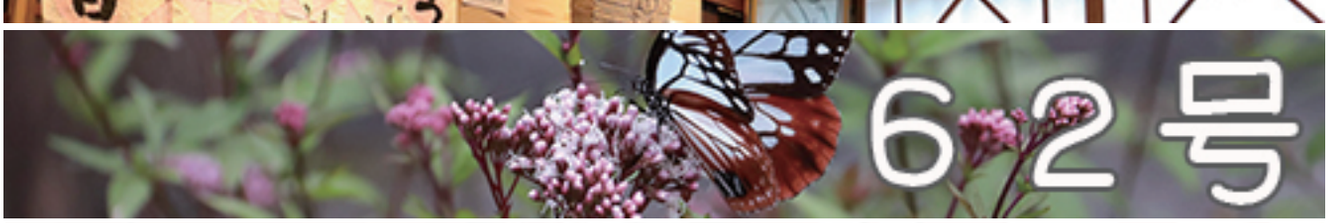


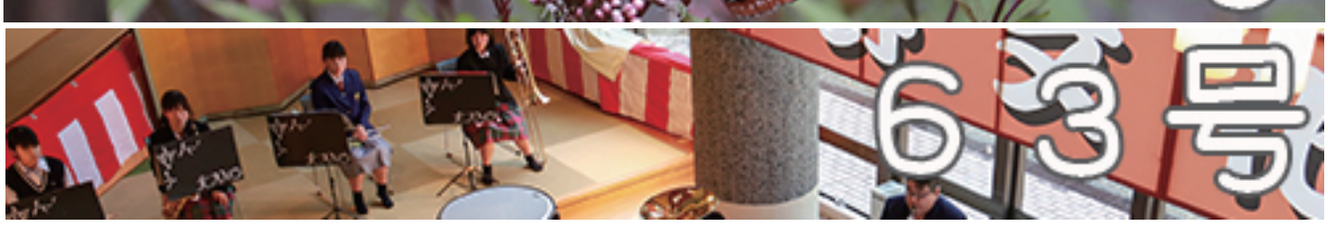












まちづくり応援団えーる

まちづくり応援団えーる

謹　賀　新　年
～二年詣りと初日の出～



えーる！
発行：まちづくり応援団えーる

皆さま、新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。令和2年初の「えーる！」では、年末年始の様子をご紹介します。

年越しの二年詣りでは、二所山田神社を訪れました。大みそかはかなり冷え込み、しっかり着込んでいても震えがくるような寒さでしたが、境内はたくさんの参拝客でいっぱいでした！



境内では、有志の皆さんによるぜんざいの振る舞いがありました。温かい餡の汁とお餅の振る舞いのおかげで、冷えた体も温まりました。付け合わせの漬物も、ぜんざいの甘さを引き立ててくれていましたよ。

日付が変わると、皆さんが続々と参拝をされていました。境内では餅まきも行われ、皆で新年の訪れを祝っていました。



参拝の後、初日の出を拝むため天神山に上ってみました。うっすらと空が明るくなりはじめましたが、山と木々に隠れてなかなか太陽が見えません。それならばとコアプラザかのに移動すると…太陽が目の前に！

コアプラザかのは撮影したのは8時すぎ。もう少し早くたどり着けば、山から顔を出す太陽が拝めそうですよ。



昨年１２月１４日の開催で２７回目を迎えた、かの冬花火「銀嶺の舞」。当日は花火の煙が散るぐらいの、適度に風が吹く絶好の花火びよりになりました。お楽しみ抽選会の当選者が読み上げられる中、だんだん場所取りの人が集まってきます。鹿野を紹介する動画がスクリーンで流れ、静かになったと思うと……賑やかな音楽に合わせて、レーザー光線とスモークの演出が始まります。そして、ドーン、ドーンと上がり始める花火に、観客も大興奮！　たくさんの人が、夜空にカメラを向けて写真や動画を撮っていましたよ。夜空から目の離せない、次にどんな花火がくるんだろう……と、わくわくしながら過ごすことのできた時間になりました。

大迫力！銀嶺の舞

音と光に乗せて花開く、冬の花火ショー

３０年の時を越えて



えーる！
発行：まちづくり応援団えーる

この冬はほとんど雪もなく、暖かい日が続きますね。今月号の「えーる！」は、２月２日にあったタイムカプセルの開封式の様子をお届けします。

このタイムカプセルは、鹿野が町制であった頃、50周年の記念に埋められたものなのだとか。その当時はまだ小学校低学年だったためか、何を入れたのかも覚えていないありさまですが、鹿野総合支所の前庭にあった埋設地の碑のおかげで、イベントがあったことは知っていました。いつかこれを開くことになるのだろうな……と思っていましたが、まさか今年がその日だったとは！　取材はもちろんですが、わたしもカプセルに関係する参加者の一人として、式典に臨みました。

タイムカプセルが掘り起こされる際の映像が流された後、ついにカプセルの開封です！　蓋が開けられ、次々に並べられていく品を前に、どんなものが入っているのだろうかと、ドキドキしましたよ。

開封の後、会場に集まった皆さんも同じ気持ちのようで、収納品を自由に見ることのできる時間になると、会場のあちこちから昔を懐かしむ声が聞こえてきました。





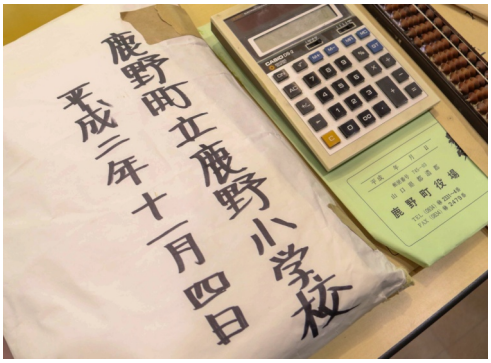
鹿野総合支所前の埋設地の下には、こんなカプセルが埋まっていたんですね！

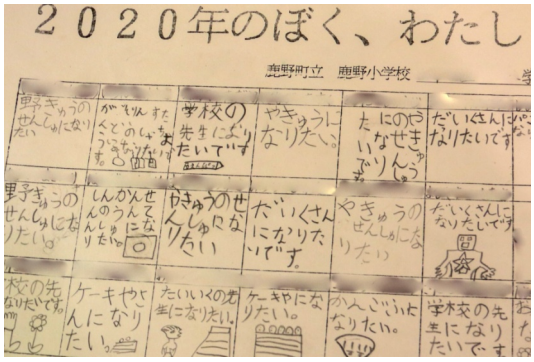
カプセルの中身は……





カプセルの中身は……







開封された収納品が、鹿野中学校の校長先生をはじめとした代表の人に手渡された後、参加者も懐かしい品々を見ることができました。町役場の各課が入れたものの中には、電卓やそろばんなんてものもありましたよ。

小学校の封筒の中には、各学年の児童が書いた将来なりたい自分の寄せ書きがありました。学校の先生、野球選手、ケーキ屋さん……それぞれの夢が書いてあって、とても懐かしい気分になりました。

そしてもう一つ、未来へのメッセージと題した手紙も受け取りました。30年もたつと、もういない人からのメッセージが届くことになります。わたしもすでに亡くなった祖父母からの手紙を受け取り、日々の生活を反省することしきり……当たり前のことが書いてありましたが、その当たり前もきちんとできているかな？

と、自分を省みるのにうってつけの機会になりましたよ。

行政資料などは、3月末までコアプラザかのに展示される予定です。

30年前の鹿野に思いをはせながら、資料をめくってみてはいかがですか？

鹿野を応援する地域情報紙 えーる！



もっと もっと 輝くまちへ

～子たぬきのパン　うめざわしのぶさんの挑戦～

もうすっかり暖かくなって、春の訪れを感じますね。「えーる！」も春を迎えるにあたり、新しいレイアウトになって鹿野の情報をお届けします。

皆さんは、渋川で「子たぬきのパン」を営む、うめざわしのぶさんが新しい挑戦をしていることをご存知ですか？

うめざわさんが鹿野の魅力は何かと考えたとき、一番に思い浮かんだのは、鹿野で暮らす「ひと」だったそうです。鹿野の「ひと」を、もっと知ってもらいたい。そのために、作品を展示したり、子育てや、昔からの遊びや技術を学ぶ場を作りたいという思いから「お店の中に、魅力的な鹿野の暮らしや人々の営みを伝えられるスペースがあったらいいのでは？」と考え、お店の2階をギャラリーに改装する準備を進めているんですよ。

5月下旬からの開始をめざすギャラリー最初の展示は、お店の建屋を作った大工さんでもあり、今は右の写真のような仏像などを趣味で作られている中西喜熊さんの作品になる予定です。

その後も、ジャンルを限らず「鹿野をテーマにした作品」を広く募集されていく予定だとか。

うめざわさんの願いは、鹿野に訪れる人が増え、今以上に魅力を感じてもらえることによって、まちが元気になること。それによって、鹿野に住む人にも、鹿野の良さを再発見してもらえること。つまり、鹿野のファンが増えてほしい！　ということですね。



鹿野の魅力を伝えるギャラリー作りに、うめざわさんの情熱を感じることができました。素敵な「鹿野」の作品が閲覧できる日が、楽しみです！

子たぬきギャラリー

営業日　木・金・土・日曜日
１０時～１７時

問合せ　子たぬきのパンうめざわさん
☎０９０-８３９３-５７９３

※５月下旬から閲覧可能となる予定です。

▼ホームページはこちらから

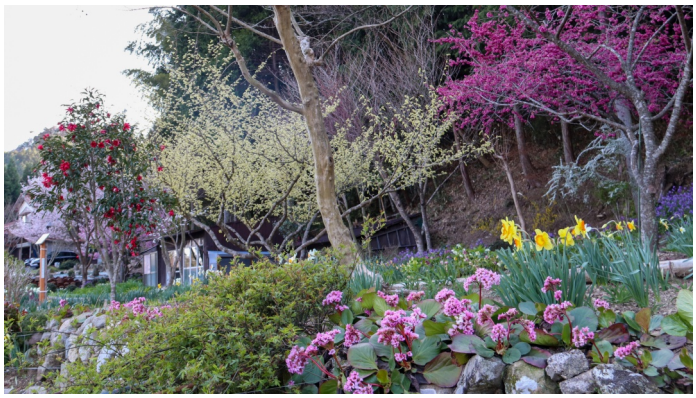
鹿野の「隠れた資源や魅力を発掘」し発信…!!

～里山オープンガーデン～



雑木を植え、そこにベンチを設置し、木漏れ日を楽しむ計画を進めてきた「鹿野の風」プロジェクトさんが見つけた、たくさんの素敵な庭たち。５月３１日（日）まで、２０の庭や森が開放されます。この取り組みに秘められた思いとはどんなものなのでしょうか。実際に現地を訪ねながら、その思いに迫ります。

それぞれの庭や森の目印は、この黄色い旗。緑の中に、とてもよく映えています▶



庭を歩いて、驚いたのはその完成された空間でした。背の高い木から足元に咲く花まで、丁寧に手入れされた庭の中は、思わず足を止めて眺めていたくなります。水の音が聞こえ、山に面した場所に吹く風は涼しく、赤や黄色とさまざまな色の花が咲く庭は、都会にはない里山ならではの庭です。ベンチに腰掛けて、この庭の中でゆっくりとした時間を過ごすことで、あくせくと生きる時間を忘れることができるような、そんな気がしました。里山ならではの癒しが、この場所にあるように思います。

森の中は、まさに別世界。石鍋工業団地そばに、故・伊藤芳高さんがたった１人、１７年の歳月をかけて整備した山野草のエキでは、４月上旬から５月末まで、約３５０種類の山野草が木漏れ日の中、目を楽しませてくれます。休憩所についたら、今度は耳で楽しむ番。目を閉じて、森の中の音に耳を澄ませてみてください。吹き抜ける風で揺れる木々の葉擦れの音、時々聞こえる、鳥たちの鳴き声。花を育む森というものを、感じることができます。





▲期間中の案内所となる、ふる里マルシェかの

鹿野の過疎化を食い止め、皆がうらやむような場所を作りたい……「鹿野の風」プロジェクトの一員である福田さんに、このイベントのきっかけを訪ねたとき、その根底にある思いを感じました。いま、鹿野は急速に高齢化・過疎化が進んでいます。自分たちの故郷が、このまま元気を失っていかないように、なんとかしたいという思い。広島や福岡と高速道路でつながる立地を生かし、１年中交流が持てる場所を作りたいという思いを、福田さんはさまざまな場所で語り、伝える取り組みも続けています。

「いずれは、鹿野を花でいっぱいにしたい。木立と花の中に町があるような光景を作っていきたいです。今回は２０であった庭や森が、いずれは鹿野全体が参加するイベントにしていきたいと思います」と語る福田さん。

「鹿野の風」は、鹿野を変えようと動き続けています。

里山オープンガーデン

期間　５月３１日（日）１６時まで　※庭主さんの都合で開放日・時間は異なります。

問合せ　ふる里マルシェかの☎０８３４－５１－００９１

鹿野を応援する地域情報紙

えーる！



鹿野の春を彩る“高嶺の花”

梅雨の季節が近づいて、晴れの日は暑さを感じる日が増えてきましたね。皆さまは、いかがお過ごしでしょうか。

今月号の「えーる！」では、鹿野の春を感じさせるものを追いかけてみました。

まずは、町のあちこちで見ることのできるシャクナゲをご紹介します。

ツツジの仲間であるシャクナゲは、ご存知のとおり、鹿野町の花として定められていました。

町花制定の話が出たのは昭和59年のこと。町制施行45周年を記念して、町民憲章などと共に町花選定をしようという動きが起こりました。

アンケート調査などの結果、昔から町の中にたくさん咲いており、町民の皆さんに親しまれていたシャクナゲが町花として選ばれたんですよ。

シャクナゲは、北は長野山、町なかであれば天神山公園に自動車で上る道の途中や、山野草のエキなど、今でも町のあちこちで見ることができます。天神山公園では上のような白い花、山野草のエキでは右のような薄紅色のシャクナゲを見かけることができました。



２つの写真は5月半ばの雨上がりに撮影したものです。香りを楽しむことはできませんでしたが、大きな花びらは雨に負けずに開いて、目を楽しませてくれましたよ。

また、シャクナゲは花木の女王と称されるほど華やかで美しい花ですが、毒を持つことや、原種が高山の奥地にあり、花を採るためには大変な危険を伴ったことから、美しいけれど手の出しがたいものをさす「高嶺の花」という言葉の由来にもなった花なのだとか。

身近な花に、びっくりな逸話ですね。

発行 まちづくり応援団えーる（https://yell.link/）

鹿野の昔話「狐の恩返し」

鹿野は田植えの時期を迎えています。倉富良枝さんのまとめた「鹿野の昔話」の中から、田植えにまつわる昔話をご紹介します。

昔々、田尻に与吉という農家の者がいた。与吉の作る田は、三里離れた葉の内村にあったから、6月の田植えの時期には、馬を連れて長い道を歩いて仕事に向かっていた。

その日も帰る頃には日がとっぷり暮れて、狐原を通って堤垰まで帰って来た頃には、すっかり夜になってしまっていた。

堤峠には狐が出て人を化かすんと……そう人々が噂するほど寂しい場所だけども、田尻に帰るにはこの道を通らなければならない。

与吉が疲れた体に鞭打ちながら峠を越そうとしたときだ。与吉の目に、一人の娘が目に留まった。道の端でうずくまっていたその娘に声を掛けると、

「田尻まで行く用事があるのですが、足を痛めて動けなくなってしまいました。どうか、その馬に乗せてもらえませんでしょうか?」

娘はそんなことを与吉に頼んできたのだ。

勘のいい与吉は、ははぁ、これが狐か。娘さんに化けて出てきおったでよ……内心そう思ったが、そこは知らんぷりをしてこう言った。

「そりゃあ難儀じゃろう。わしも田尻に帰るところじゃけえ、馬に乗りんさいや」

与吉は、娘を馬に乗せると、落ちるといけないからと言いくるめて、しっかりと縄で馬に縛り付けた。

そして何食わぬ顔で出発し、堤峠を越え、田尻の家にたどり着いたのだった。

「おーい、お客さんの狐を連れてきたでよ。早う、明かりを持ってこい」

大声で家族を呼ぶ与吉に、狐は正体を見透かされていたと気づいた。このままでは捕まって鍋にでもされてしまう……焦って逃げ出そうとしたが、縄で縛られて逃げるに逃げられない。とうとう正体を現して、わんわんと泣き出してしまった。その様子に、さすがにかわいそうに思った与吉は、よく言い聞かせて縄をほどいてやることにした。

「これっきり、人を化かしたりするなよ。わかったか」

狐は返事代わりに尻尾を振って、堤峠に逃げていった。

そして翌日。与吉が田植えの続きに葉の内へ行くと、すっかり田植えが終わっていた。

不思議に思った与吉は、田んぼのあぜに狐の足跡があるのを見つけた。どうやら狐が、恩返しをしてくれたのだろうと、与吉は思ったのだった。

「堤峠」と「狐原」

今回のお話の舞台になったのは、現在の堤と中津の境にある「堤峠」です。作中で、与吉はこの道を通って田尻から葉の内までを行き来しています。三里、つまり約12キロメートルの道のりを歩いて仕事に向かい、肉体労働をして同じだけの道のりを帰っているというところが物語の中で語られます。今では自動車を使っても10分以上はかかる距離を移動していたのだと思うと、昔の人は頑強だったのだなと感じさせられました。

狐が現れたのは、堤峠にさしかかる手前の「狐原」という場所になります。今でいう宇賀神社がある辺りになるでしょうか。

下の写真は、狐原付近から堤峠に向かう道を撮影したものになります。

この辺りで与吉は狐と出会ったのでしょうか。物語の世界が、なんだかとても身近になった気がしました。





▲作中では６月ですが、今は５月に田植えですね。

鹿野を応援する地域情報紙 えーる！



ホタル、舞う

梅雨の季節を迎え、曇りや雨が多いですが、皆さんはいかがお過ごしですか？ 今月号の「えーる！」では、梅雨の晴れ間に見ることができる初夏の風物詩、ホタルをご紹介します。

例年、この時期になると、大潮ホタル祭りやホタルのタベコンサートなど、鹿野のあちこちでホタルに関するイベントが開かれています。

今年は残念ながら中止となってしまいましたが、ホタルは例年と変わらず飛んでいました。せせらぎパークそばの川べりには、たくさんの人がやって来て、ホタルの舞う姿を楽しんでいましたよ。

上の写真は堤のチェーン脱着場そばで撮影したものですが、それなりに町に近い場所でも、これだけのホタルが舞う姿を写真に収めることができました。

光の筋が写る写真が撮れるのは、鹿野に生息するホタルが、ゲンジボタルの仲間であることを示しています。ちなみに、光の玉が写る写真は、ヒメボタルの仲間を撮影すると撮ることができます。種類ごとに、光り方が違うんですね。

子どもの頃、ホタルが舞う様子は、毎年見ることができる当たり前の光景でした。しかし、大人になって、ホタルが舞う姿を撮影していると、これは都会にはない鹿野の魅力なんだな、と感じることができました。

ホタルは、きれいな川でしか生息できません。当たり前のように舞う姿は、鹿野の清流があってこそ見ることができるもの。何気ない光景は、実はとてもすばらしいものなんですね。この光景が、これからもずっと続いてほしいと思います。

ササユリも見頃でした



6月には、天神山や長野山でササユリが咲きます。名前のとおり葉っぱがササの葉のような形をしていて、同じ緑の草木の中でも、特徴的で目に付きますよ。

天神山には人工的に栽培されたもの、長野山には珍しい自生したものが咲いています。どちらのササユリも、梅雨のどんよりした天気の中、真っ白な花をつけていて、とてもきれいでした。

6月に山を歩く時は、ぜひササユリの花を探してみてくださいね。

鹿野のむかしばなし

仁保津の大ウナギ

仁保津地区には、かつて大番社に、そして近年では熊野神社に奉納される、仁保津神楽というものがある。清目神楽に始まり、花の三玄（けん）の舞に至るまで、全部で24の神殿（かんどん）（曲目）が舞われているのである。

この神楽のおこりは、今から３００年以上も前にさかのぼると言われている。

「おおい、大変じゃあ」

栗ノ木の、蛇つなぎという所のこと。川魚を取りに行っていた若者が、血相を変えて村に駆け戻って来た。ひどく興奮した様子で、息を整えて落ち着きを取り戻すために、しばし時間を必要とするほどだった。

「そねぇに慌てて、どうしたんじゃ」

あまりの様子に、若者を迎えた村人もいぶかしんだ。

「とにかく人手がいるんじゃ。お前ら、手子（てご）（手伝い）せぇ」

若者は口からつばを飛ばしながらまくしたてるばかりだから、一向に要領を得ないまま6人の男衆が集まった。そして、駆け込んできた若者と共に川へと向かったのだ。

「おいおい、こりゃあ、なんちゅうことじゃ」

そこにいたものに、皆が皆、目をひん剥いて驚いた。

川から顔を出していたのは、あまりにも巨大なウナギだった。7人がかりでも少々手に余る大きさで、結局もう1人を加えて、ようやく村まで運ぶことができたほどだ。

「こりゃあ、わしらの村だけじゃあ食い切らんでよ。近くの村にも、分けちゃろうじゃあないか」

あまりに大きいそのウナギは、近隣の7つの地区で分けて食されることになった。

しかし、ウナギを食べてから1カ月もたたないうちに、近隣の村では重い疫病が流行り始めてしまった。

ウナギを分け合った7つの地区の代表者は、この事態をどうにかするべく、話し合うことにした。

ひょっとすると、あのウナギは神の使いだったのかもしれない。そういう話が誰かの口から出て、確かにそうであろうと誰かが賛同する。そして、神の使いを食して神様を怒らせてしまったのだから、神楽を奉納してお鎮めしよう、という話に落ち着いた。

代表者たちは、疫病の平癒祈願のため、7年ごとに神楽を奉納することを神様の前で誓ったのだった。

そして一度目の奉納が終わると、あれほど流行していた疫病はぴたりと治まった。

やはりあの大ウナギは神の使いであった。そう確信した村人たちによって、数百年もの間、神楽は舞い続けられているのである。

各地に伝わる大ウナギ伝説

このお話は、鹿野町誌の「仁保津神楽」の項に書かれていたものです。

実はこのお話、本筋はほとんど同じですが、細かな部分が異なるお話が、鹿野以外にも伝わっています。

例えば同じ鹿野町誌に収録された「杉ノ河内の大鰻」というお話は、徳地に伝わっている昔話を基にいくつかの説を取り入れて記されています。このお話の中では、大ウナギ事件は３００年前ではなく８００年前に起こったことであったり、神楽の奉納が7年ではなく13年に一度であったり、奉納する場所が今井の三嶋神社（下写真）であったりと、違いがみられます。

想像ですが、お話の基となる事件が起こり、昔話として語り継がれていくうちに、少しずつその形を変えていったのかもしれません。

お話にある7つの地区とは鹿野だけではなく、新南陽や徳地も含みます。各地で少しずつ内容が変わっていっても、不思議ではないと思います。

物語の源流に、いろいろな想像を巡らせるのも楽しそうですね。



鹿野を応援する地域情報紙 えーる！

ファンの集う場所に

～コーヒーがつなぐ縁　海軍さんの珈琲店～



▲取材のときに来店していた、下松市から来た皆さんと洞崎さん

大雨や新型コロナウイルスの不安が続く日々ですが、皆さんはいかがお過ごしですか？　今月号の「えーる！」では、この不安の中でも元気に活動されている人たちを紹介します。

まずは、鹿野ブランド創出研究会の代表・洞崎さんがマスターを務める海軍さんの珈琲店を紹介します。呉市で復刻された海軍のコーヒーを提供するこのお店、どこかで見たことはないでしょうか。実はこのお店、年2回開催している「いっておかえり。鹿野市」にも参加しているんです。洞崎さんは鹿野市会場にある愛ちゃん家（ち）などでコーヒーを提供していましたが、その胸中には、町なかに人の集まるサロンを作りたい、もっと頻繁に、人が集まる場所を作りたい……そんな思いがありました。



どうやって実現するかと考えていたところに、商工会の近くに住む福本さんから、自宅をサロンとして使用してよい、という話があったんです。このことで一気に思いが現実になり始め、ついに4月、お店がオープンしたんですよ。

「海軍さんの珈琲店は、鹿野の人だけでなく、市外から鹿野を訪れた人も集まることができる場所として利用してもらいたいと考えています。鹿野をもっと好きになって、鹿野のファンが増えてくれると嬉しいです」と洞崎さん。

海軍さんの珈琲店は、毎月第1土・日曜日の10時～14時に開店します。運営費として１００円を寄付することでコーヒーを楽しむことができます。海軍が飲んでいたというコーヒーを片手に、皆で集まって、話をしたりしてみませんか？

地域を大家族に

asis ～２人から始まった、大きな地域の輪～



△今回のスタッフには、ママ友やその子どもたちも参加していました。

７月４日、コアプラザかのかで地域食堂「ふらっと食堂」が、豚丼と食品配布を行いました。会話が弾み、明るい笑い声が響く会場では、３００食もの豚丼が作られていました。こうした活動は、どのような思いで行われていることなのでしょうか。ふらっと食堂を運営する異世代交流子育てサロンasis（アズィズ）の数井さんに、お話をうかがいました。

「asisは、代表の岡崎さんと私の２人で運営しています。研修で偶然に岡崎さんと出会い、鹿野にはなかなか地域の人が集まることができる場所がないね、みんなが集まる場所を作りたいね……そんな思いを語り合ううちに意気投合して始めた活動です。ふらっと食堂の名前は、誰もがふらっと来ることができて、みんながフラットに来ることのできる場所にしたいという願いで名付けました。食堂の他には、女性の居場所づくりをめざした、あったカフェも開催しています」数井さんたちは、子どもと地域の人が触れ合える機会がない現代、顔見知りを増やし地域住民同士の垣根をなくしたい、そんな思いを抱いて活動を続けています。

食品配布コーナーでは、徳山高校鹿野分校の学生さんもボランティアとして参加していました。参加者として足を運ぶうち、スタッフをやってみたいと思ったのだとか。

ふらっと食堂には、お二人のママ友やボランティアがスタッフとして参加しています。食材も、地域の人などから提供されるもの。まさに、地域みんなで作り上げている活動なんですね。

わたしも豚丼をいただくことにしました。大鍋で心をこめて作られた豚丼は、味もよくしみ込んで、１５０円という価格で提供されていることが驚きのおいしさでしたよ。「地域のみんなが大家族のようになれる場所を作りたいです」２人の思いは、少しずつ地域の輪を作っていっている……そんな印象を受けました。

次回は「冷やしうどん」をテイクアウトで提供します

日時　８月８日（土）１１時～１３時３０分
場所　コアプラザかの
料金　２００円（高校生まで無料）
提供　３００食　※可能な限り予約をお願いします。
問合せ　asis数井さん☎０９０－９５０９－４４５９





鹿野を応援する地域情報紙 えーる！

看板が導く鹿野の水



やわらぎ始めているとはいえ、暑い日が続いていますね。今月号の「えーる！」では、暑さの中でも変わらず流れる鹿野の水、潮音洞に関する記事をお届けします。

皆さんは、漢陽寺のそばに、上の写真のような木製の看板があることをご存知でしょうか？

この看板は、明るく元気な鹿野をつくる会の皆さんが、潮音洞から清流通りに続く水路沿いをPRするために設置した案内看板なんですよ。

木陰に立つ看板は、7月8日、鹿野中学校の生徒たちも参加して設置されたばかりです。

看板に書かれた力強い文体が示す、潮音洞取水口に向けて歩いてみることにしました。

取材したのはお盆の頃でしたから、まだ暑さも厳しく、セミの鳴き声が聞こえる、まさに夏真っ盛り。汗をかきながら山を越えて、取水口にやってきました。





潮音洞は、取水口から出口まで、長さ約90メートルの用水路です。江戸時代初期、徳川第4代将軍の頃に造られた用水路ですから、工事をするにも機械などありません。岩盤は人の力で掘り抜かれ、4年の歳月をかけて完成しました。

1日5000トン近い水を流し、下流水路はなんと1キロメートルにも及ぶ潮音洞は昭和41年、県史跡に指定されているんですよ。

かののむかしばなし

田原川騒動

明治になって間もない5月の頃、山口諸隊の脱走兵が鹿野にやって来た。１００人ほどの脱走兵は、民家や寺に押し入り、勝手に宿泊したり、乱暴を働いたりと、やりたい放題をしたのだった。

翌日、脱走兵たちは石州方面へと逃げていった。その日はお薬師様の縁日であり、仕事を休んで酒肴を楽しむ日になるはずだったが、昨夜に暴虐を尽くされた住民たちの間に「山口から兵隊が攻めてくるんじゃないか」という話が流れたものだから、町はにわかに緊張し始めた。

荷物を片付けたり、戸口を固く閉める家が続出する中、思い出されるのは昨晩の乱暴だ。またあのようなことが起こってはかなわぬと、男たちは手に武器を握りしめて、大町や垂門方面、そして田原川に陣取った。

後に、ここまでの大騒動になったのは、脱走兵が追っ手が来ることを予想し、時間稼ぎのために噂を流して混乱させたのだと言われたが、定かではないことである。

噂の真偽はともかく、本当に兵隊が今井峠を越えて姿を現した。馬蹄の音が響き、次々と兵士たちが田原川の対岸に姿を現した。それを見て戦いを決意した町人たちは、これ以上近づけてなるものかと手にした銃を撃ち、先頭の兵士を撃ち倒した。

驚いたのは兵隊たちだ。彼らは脱走兵を追って来た追討兵だったのである。山口からここまでやって来て、突然攻撃を受けたのだ。サヤノ原の畑に多数の雀おどしが設置されていたことも、町人が多勢であると追討兵に錯覚させる原因になった。

追撃を警戒し、後方に退いた追討兵は、今井から柏原に入る道に進路を変えた。中山観音堂に入ると、お返しとばかりに、漢陽寺に向けて大筒を撃ち放った。飛んで行った弾丸は、漢陽寺山門に命中し、ドガンと音を立てて扉を破損させたのだった。

この戦いは小半刻（約30分）ほど続いた。だがそのうちに、町人たちは兵隊たちが昨晩の脱走兵を追って現れたこと、追討兵たちは脱走兵が鹿野で乱暴を働いて行き、自分たちがその仲間と思われていたことを知った。

もともと無用な争いであったことを双方が悟ったことで、戦闘は終わったのだった。

当時、各地で起きた兵士の脱走騒動は、毛利藩の兵制改革によって発生したものと言われている。田原川の騒動もまた、改革によって生まれた歪みの1つなのだった。

漢陽寺山門の扉に残る穴は、なぜ開いたのでしょう。鹿野町誌から、その逸話をご紹介します。

漢陽寺山門に残された穴

田原川騒動の際、中山観音堂から放たれた大筒の弾が漢陽寺の山門に穴を開けた話を掘り下げてみたいと思います。

中山観音堂から漢陽寺の山門までは、約８５０メートルほど離れています。中国自動車道の上を越え、まっすぐ山から山門までを砲弾が飛んだことになります。

その話を裏付けるように、山門の扉には写真のような穴が開いています。漢陽寺山門は修理される機会がありましたが、この逸話があったことから、穴は補修されることなく残されたそうですよ。



しかし、なぜ漢陽寺が狙われたのでしょうか。当時の町並みはわかりませんが、おそらく漢陽寺以外に目立つ建物がなく、目標にされてしまったのではないかと思います。

町人が陣取った田原川までは1キロメートル以上の距離があり、そちら方に反撃することは難しかったのかもしれません。

どんなことが起こったのか、想像するのも楽しいですね。

鹿野を応援する地域情報紙 えーる！



和紙と、竹と、土壁の世界

昼間も涼しくなり、秋らしくなってきましたね。今月号の「えーる！」では、子たぬきのパンで9月27日まで開かれた、向道湖ふるさと芸術村作品展をご紹介します。

鹿野の特産品である山代和紙を材料に使ったパッチワーク、山代和紙を台紙に使った押し花や写真の他、竹細工などさまざまな作品が、2部屋にまたがるほどたくさん集まっていました。

この作品展は、どのような思いで開催されたのでしょうか。その思いを、向道湖ふるさと芸術村の村長・東島さんにうかがいました。

「ギャラリーを下見した時、一番に感じたのは、土壁の質感がとても良いことでした。木造・土壁の建屋は大変貴重なものです。皆さんがこの建屋に訪れたい、この建屋を残していきたい、と思ってもらえるように、土壁の雰囲気に合う山代和紙と竹を使った展示会にしようと思いました」

そう語る東島さんの思いが伝わったのでしょうか、取材の日は雨にも関わらず、たくさんの人がギャラリーを訪れ、作品に見入っていましたよ。

暖色の照明が土壁を照らし、その中にいくつもの作品が並んでいるギャラリーは、腰を下ろしてゆっくり味わいたくなる、不思議と気持ちが癒される、そんな空間でした。




前田勢子（まえだせいこ）さん（左）と勝屋八州子（かつややすこ）さん（右）

出展者のおふたりに聞きました

取材の日に、当番で会場にいらっしゃった出展者の前田勢子さんと勝屋八州子さんに、出展された作品や、ご自身の活動についてお聞きしてみました。


和紙作品と共に展示された竹細工



前田さんの展示作品は、造花と押し花です。「山代和紙は真っ白だから、染めて使うことができます」と語られるとおり、真っ白い山代和紙を染めて形にした造花は、淡い色合いで染められていて、とても優しい印象を受けました。

押し花作品は、山代和紙の台紙に花を入れて制作するのですが、重要なのはよく水分を抜くことなのだとか。台紙の裏には、たくさんの乾燥材が入っていました。きちんと水分を抜くと、５年程度は鑑賞できるんですよ。

勝屋さんの展示作品のひとつである山代和紙のパッチワークは、ポジャギという縫い方で、構想期間を含めて約２カ月間で制作されました。布に比べると弱い材質である和紙を扱ったため、一針一針気を付けながら縫い上げたそうです。



この作品は、平成23年に起きた東日本大震災のチャリティバザーのポスターとして作られたんですよ。

１０月のイベント情報

●秋 autunno

県美展で大賞を受賞したロベルト・ピビリ氏が、この展示のために描いた作品が並びます。

期間　10月15日（木）～11月15日（日）

場所　子たぬきギャラリー

●ふらっと食堂テイクアウト

10月17日（土）に鶏そぼろの二色丼、31日（土）に豚ひき肉入りカレーのテイクアウトを行います。

場所　両日ともコアプラザかの

時間　17日…11時、31日…10時

※詳しくは、コアプラザかのに置いてあるチラシをご覧ください。

鹿野を応援する地域情報紙

えーる！



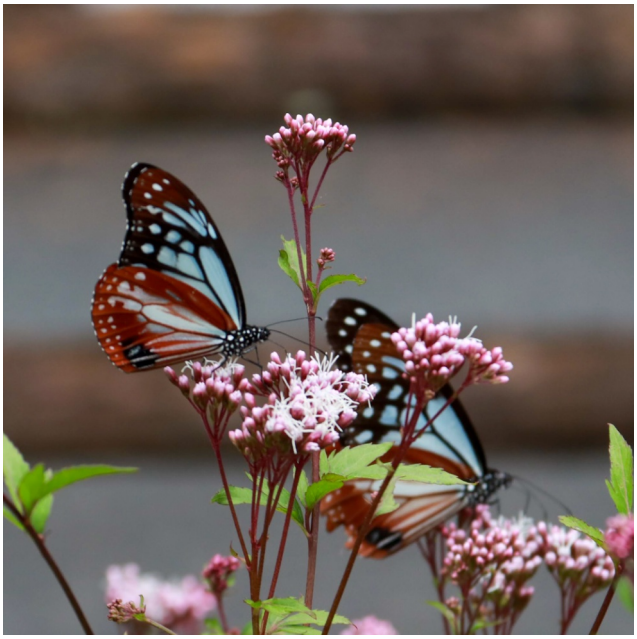
アサギマダラがやって来た チョウの舞う里　鹿野

朝晩の冷え込みが強くなって、冬が近づいているのを感じますね。今月号の「えーる！」では、10月半ば頃、鹿野に飛来していたアサギマダラについてお届けします。

名前のとおり、あさぎ色をしたこのチョウの特徴は、渡り鳥のように海を渡って越冬することです。秋になると、南西諸島や、遠くは台湾まで飛んでいき、なんと2500キロメートルも移動した個体が見つかったのだとか。そんなアサギマダラが蜜を吸っているのはフジバカマです。フジバカマには毒があり、アサギマダラもこの毒をたくわえて、外敵から身を守っているんですよ。

二所山田神社近くに植えられたフジバカマには、思わず「すごい！」と声を出してしまうほどたくさんのアサギマダラがを飛んでいました。フワフワと宙に浮くように舞うアサギマダラは、かなり近いところにも飛んでくるため、どれを撮ろうか迷ってしまうほど、アサギマダラに囲まれての撮影になりました。

本州の関東以西・四国・九州に分布するフジバカマは、鹿野では撮影した二所山田神社付近や、金峰地区にも植えられています。川岸の護岸工事などの影響で絶滅のおそれがあると言われるフジバカマですが、鹿野ではまだあちこちで見ることができるんですね。



フジバカマは適切な環境なら、地下茎で一気に群生する強い花でもあります。もし、鹿野のあちこちでフジバカマが育ち始めたら、アサギマダラが、鹿野の町じゅうで舞う光景が見られるかもしれません。

鹿野の秋がアサギマダラで彩られる未来も、あるかもしれませんね。

鹿野の秋見つけた

道路沿いを歩いていると、コスモスを見かけることができました。白やピンク、赤など、いろいろな色のコスモスが咲いています。ピンク色の花は、根元のあたりが濃い色をしているものもありました。コスモスは意外と背が高く、細い茎が風に揺れているのが印象的でした。辺り一面に咲いている姿とはまた違って、少しだけ群れて咲く姿というのも、趣きがあっていいですね。





秋が深まってくると、紅葉の美しい季節を迎えます。左の写真は昨年漢陽寺で撮影したものですが、この「えーる！」が皆さんの手に届く頃には、こんな紅葉が見られるかもしれませんね。特に漢陽寺で見ることのできる紅葉は、他の場所に比べても深い赤色になっているように思います。少し昼間でも寒さを感じるようになってきましたが、散歩のついでに紅葉狩りをしてみる、というのもいいですね。

今年の冬花火は映画と共に

12月が近づき、かの冬花火「銀嶺の舞」の季節が近づいてきました。例年「銀嶺の舞」は総合体育館周辺で行われますが、今年は鹿野小中学校のグラウンドで、車に乗ったまま映画を見るドライブインシアターと合わせて行われます。

シアターチケットは前売りのみの対応となります。詳しくは、周南観光コンベンション協会ホームページをご覧ください。

また、一般駐車場はありませんので、悪しからずご了承ください。

日時 12月12日（土）16時30分～

問合せ 冬花火実行委員会事務局☎0８０-４２６９-４６６２

チケット購入ページはこちら▼



鹿野を応援する地域情報紙

えーる！



例年、かのふるさとまつりと同時開催する鹿野文化祭。今年は、新型コロナウイルスの影響を考慮し、文化祭月間として、11月の1カ月間、作品展示をする形で行われました。

初日のオープニングセレモニーでは、日本舞踊、周南フィルハーモニー管弦楽団五重奏団の演奏と共に、鹿野中学校吹奏楽部による演奏が披露されました。

現役生だけでなくOGの皆さんも加わった演奏。特に感動した曲目は、鹿野中学校校歌でした。それを聞いていると「錦の川のせせらぎほとり……」という一節が、思わず頭をよぎりました。中学校を卒業して20年以上になりますが、ふと昔の頃を思い出し、とても懐かしい気持ちになりました。

2階の展示会場には、小中学生の作品や、以前「えーる！」でご紹介した中西喜熊さんの木工作品やパッチワーク作品が展示されていました。鉛筆や絵の具を使った作品を見ていると、昔、授業でこういう絵を描いていたな……そんなことを思い出しました。

例年とは違う形ではあったものの、将来「あの時はこんな感じだったよね」と思い出に残るような、そんな文化祭になったと思います。


中西喜熊さん作の彫刻作品


２階に展示されていた学生の展示作品

コロナ終息、皆の心が一つに



10月24日に、新型コロナウイルスの終息を願い、灯ろうを作って清流通りの水路に流す催しが行われ、参加者はそれぞれの願いを書いた灯ろうを制作しました。

参加者の1人にイベントの感想をうかがうと「コロナが早く終息するといいね、と親子で話しながら灯ろうを作っているのを見ると、とても微笑ましい気持ちになりました」と語ってくれました。

制作された灯ろうは、清流通りの水路に流された後、最後にお焚き上げを行いました。漢陽寺・龍雲寺の両住職によるお経があげられる中、燃えていく灯ろうを眺めていると、コロナ終息の思いで、参加者みんなの心が一つになったように感じられました。



モノクロ画家の描くクリスマス



渋川の子たぬきギャラリーさんで、モノクロ画家マエサキマユさんの展示「不思議の国のクリスマス」が開催されます。

子ども達の見ている日常に潜むファンタジーをテーマにしたイラストは、インターネット上でも見ることができます。どの絵もとても細かく描き込まれ、やさしさを感じる画風でした。

このタッチが描き出すクリスマスは、どんなものになるか、とても楽しみです。

マエサキさんが画材として使うのは、なんとボールペン。大掃除や年越し準備の休憩を兼ねて、どこにでもあるボールペンが描き出す、ここにしかない世界を見に行きませんか。

イベント詳細

日時 12月3日～27日の木～日曜日10時～17時

場所 子たぬきギャラリー

問合せ 子たぬきのパンうめざわさん ☎０９０－８３９３－５７９３・✉ kotanuki5@gmail.com